

古孝子伝作者攷

付 改訂古孝子伝逸文一覧

黒田 彰

一、劉向孝子伝について

二、蕭広済、王歆のことなど（以上、本誌）

三、宋躬、虞盤佑のことなど

四、徐広孝子伝について（『文学部論集』89号）

かつて中国に存した、十種を超える古孝子伝には、何らかの作者名を冠するものが多い。それら古孝子伝の作者については、以前に略述を試みたこともあるが（拙著『孝子伝の研究』へ佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）1-1、改めて個々の作者に関し、具体的な検討を加えると同時に、逸文として現在に伝わる孝子伝本文の内容についても、聊か踏み込んだ考察を廻らせてみたい。

小稿において取り上げるのは、劉向孝子伝以下、十一本の孝子伝である。小稿は、四章から成り、第一章は劉向孝子伝を扱い、第二章は、蕭広済孝子伝以下五本の孝子伝のことを検討する。第三章は、宋躬以下五本の孝子伝について検討し、第四章は、その内の徐広孝子伝本文の内容を考察する。紙幅の関係から、本誌には第一、二章を収め、第三、四章は、同題(二)として佛教大学『文学部論集』89号（平成17年3月予定）に分載することとした。併読を乞いたい。

小稿末尾に、「改訂古孝子伝逸文一覧」を付載する。これは、旧稿「古孝子伝逸文一覧」（前掲拙著1-1所収）の作成後、見出だされた四百条近い古孝子伝逸文を加え、旧稿の形を改めたもので、当一覧においては、五十音順とした孝子名の下に、孝子伝別の資料名を配してある。両孝子伝下の「金」は、金沢文庫蔵抄出本及び、その条数である。当一覧は、指導生木村明子との共同制作による。当一覧については、近稿「新出の古孝子伝逸文について」（『和漢比較文学』34号予定）を参照されたい。

漢から魏晉南北朝時代に掛けて、十種類以上出現した孝子伝には、我が国に伝存する陽明本、船橋本孝子伝（以下、両孝子伝と称する）のように、作者名を記さぬ所謂、逸名孝子伝を除き、その殆どに作者がある。それら古孝子伝の作者については、かつて略述を試みたことがあるが、^①ここで改めて孝子伝の作者に関する基礎的事実を確認し、再検討を加えておきたいと思う。

ここに取り上げる、作者名を冠する孝子伝は、以下の十本である。

- 1 劉向孝子伝
- 2 蕭広済孝子伝
- 3 王歆孝子伝
- 4 王韶之孝子伝
- 5 周景式孝子伝
- 6 師覺授孝子伝
- 7 宋躬孝子伝
- 8 虞盤佑孝子伝
- 9 鄭緝之孝子伝
- 10 梁元帝孝德伝
- 11 徐広孝子伝

1 劉向孝子伝^②

中国においては、全ての孝子伝の類は早くに滅び、目下逸文の形を通じてしか、その面影を偲ぶ術がない。それらの内、最古の孝子伝と考えられるものは前漢、劉向（前七七一前六）の作と伝えられる孝子伝であろう。劉向孝子伝（法苑珠林四十九等）はまた、劉向孝子図（太平御覽四十一等）と称されることもあつて、孝子伝と孝子伝図との密接な関係を示唆していることが、非常に興味深い。一方、劉向は列女伝七巻を著すと共に、列女伝頌図を作り（漢書芸文志）、また、列女伝七編を屏風四堵に画いたとも言うから（初学記二十五所引劉向七略別録）、劉向孝子伝と劉向孝子図との関わりについては、重要な文学史的課題としてなお今後、注意する必要がある。ところが、列女伝の場合とは異なり、遺憾なことに、劉向が孝子伝を書いたことには確証がない。劉向孝子伝に関する最も早い言及は、文苑英華五〇二に収められる唐、許南容及び、李令琛の対策に、

劉向修「孝子之図」^③

と言うものらしい（章宗源、隋書経籍志考証十三）。このことから、劉向が孝子伝を書いたことには疑いが持たれ、例えば西野貞治氏は、劉向孝子伝について、

例えば漢志にも隋唐志にも著録されず、六朝の仮託かと思われる

と述べられ、通説とすべき見解となっている。

劉向孝子伝の逸文とされるものの数は、余り多くない。

しかし、それらは、いづれの話も他の孝子伝とは一風異なる、極めて特徴的なものであることもまた、確かである。

そこで、始めに劉向孝子伝について、仮託説の検討も兼ね、その内容を簡単に紹介、吟味しておきたい。法苑珠林、太平御覽等を通じ目下、劉向孝子伝の内容が知られるものは、左の四つの話である(参考までに、両孝子伝の条数を掲げる)。

1 舜(両孝子伝1)

2 郭巨(5)

3 丁蘭(9)

4 董永(2)

まず劉向孝子伝1舜の逸文の本文を、法苑珠林四十九に拠って示せば、次の通りである(一)は広博物志四十四、釋史十に拠る)。

舜父有目失、始時微微。至後妻之言、舜有井穴乏。舜父在家貧厄、邑市而居。舜父夜臥、夢見鳳皇。自名為鷄、口銜米以哺已。言鷄為子孫。視之(是)鳳皇。(以)黃帝夢書言之、此子孫当有

貴者。舜占猶也。比年糴稻、穀中有錢。舜也乃三日夜、仰天自告過。因至是聽常与市者声、故一人。舜前舐之、日霍然開。見舜感傷市人。大聖至孝道、所神明矣

右は、章宗源が、「舜父一事、珠林原本有訛舛、文句多有不可通」と疑ったように(隋書經籍志考証)、一文意の通じ難い所がある。その内容は、掩井と歷山で耕することの一部、及び、易米、開眼譚を記したものと見られるが、中で、舜の父の夢見の話は、他に類を見ない、独特なものである。また、易米、開眼において、「舜也乃三日夜、仰天自告過」とか、「舜前舐之、日霍然開」などとする点が特異で、殊に後者は、舜子變や我が国の昔話「継子の井戸掘り」などに遍く受け継がれる、注目すべき要素となっている。次いで、2郭巨の話も、興味深いものである。その逸文の本文を太平御覽四十一に拠って示せば、次の通りである(一)は法苑珠林四十九に拠る)。

劉向孝子図曰、郭巨河内温人。甚富。父没分財、二千万為兩分。与兩弟、已独取母供養。寄住[比]隣有凶宅無人居住者、共推与之居無禍患。妻產男。慮養之則妨供養。乃令妻抱兒、欲掘地埋之於土中。得(黃)金一釜、(金)上有鉄券云、賜孝子郭巨。巨還宅主、宅主不敢受。遂

以聞^レ官、官依^二券題^一還^レ巨。遂得^二兼養^一児

右は、郭巨を「河内温人」（河南省温県）としている。埋児を中心とする大筋は、他の孝子伝類と違いないが、特異なのは、その冒頭に、意外にも郭巨が、

甚富。父没分^レ財、二千万為^二兩分^一。与^二兩弟^一、己独取^レ

母供養

とすること、家財を全て失った郭巨が、

寄住^{〔比〕}隣有^二凶宅無^二人居者^一、共推与^レ之居無^二禍

患^一

としていることである。前者は、孝子伝類にそれを記すものを見ず、独り二十卷本搜神記十一^三に、

郭巨隆廬人也。一云、河内温人。兄弟三人、早喪^レ父。

礼畢、二弟求^レ分。以^二錢二千万^一、二弟各取^二千万^一

とあるもののみが、それと酷似する（隆廬は、河南省林

県。また、後者も、孝子伝類にそのことを記すものを見

ず、ただ二十卷本搜神記に、

巨独与^レ母居^{〔客舎〕}、夫婦傭賃、以給^二公養^一

と見えるものだけが、それと共通している。面白いのは、

後者が、郭巨の掘り出した黄金の所有権を廻る伏線となっ

ていることで、郭巨は他人の土地に寄宿しているだけであ

って、すると、人の土地から偶々掘り出した黄金が、郭巨

のものである保証は何処にもない訳で、だからこそ、黄金

の上に「鉄券」が添えられている必要があり、且つ、その鉄券には、「賜^二孝子郭巨^一」と明記されていなければならなかったのである。現に郭巨は、その黄金を自分のものとは思わず、

巨還^二宅主^一、宅主不^二敢受^一

とされており、このことも、劉向孝子伝の独自記事となっている。考えてみれば、後者を欠く他の孝子伝類などは、鉄券（「丹書」へ搜神記等とも言う）の添えられている理由が判然とせず、劉向孝子伝や二十卷本搜神記は、郭巨譚の発生期の形を伝えている可能性がある。例えば二十卷本搜神記の郭巨譚を晋、干宝のものと即断することは出来ないが、それにしても、二十卷本搜神記と酷似することの多い劉向孝子図の成立は、六朝の早い時期に溯るのではないかと。ところで、郭巨に関する後漢以前の資料は管見に入らず、漢代の孝子伝図（榜題のあるもの）にも絶えてその姿を現わさない。そのことから近時、橋本草子氏は、「郭巨を後漢の人とする伝承には疑問があると言わざるを得ない」として、「郭巨が後漢の人であるという伝承は孝堂山石祠が郭巨の墓とされた北斉以後に広まったものではあるまいか」という、注目すべき見解を提出されている^⑥。従って、おそらく劉向孝子伝の郭巨譚の場合も、その成立が後漢以前に溯るものではあり得まいが、その発生については、六

朝の早い時期のものと見ておきたい。3 丁蘭に関して、現劉向孝子伝が漢代のものではないらしいことを示す、際立った特徴を指摘することが出来る。今、法苑珠林四十九に拠り、その逸文本文を示せば、次の通りである。

又、丁蘭、河内野王人也。年十五喪_レ母。刻_レ木作_レ母、事_レ之供養如_レ生。蘭妻夜火灼_レ母面、母面発_レ瘡。經_二二日_一、妻頭髮自落、如_二刀鋸截_一。然後謝_レ過。蘭移_二母大道_一、使_二妻從服三年_一。一夜忽如_二風雨_一、而母自還。隣人所_二假借_一、母顔和即与、不_レ和即不_レ与。

右を見ると、丁蘭の作った像は、「年十五喪_レ母。刻_レ木作_レ母、事_レ之供養如_レ生」とあるから、明らかに母の像であったことが分かる（右はまた、太平御覧四八二所引搜神記逸文に酷似する）。ところが、丁蘭については、数多くの漢代の孝子伝図の遺品が残されており、それらの榜題を見る限り、丁蘭の作った像は、父の像らしいのである。例えば、有名な後漢武氏祠画像石の丁蘭図（武梁祠一石）には、丁蘭二親終歿、立_レ木為_レ父、隣人假_レ物、報乃借_レ与とあり、開封白沙鎮出土後漢画像石（上層）には、

丈人為_レ像

野王丁蘭

と見え（左から）。野王は、河南省沁陽県。丈人は、岳父（妻の父）、また、老人の意、後漢楽浪彩簾には、

木丈人

丁蘭

とあり（左から）、和林格爾後漢壁画墓（中室北壁一層）には、

□丈人

□王丁蘭

と見え（左から）、泰安大汶口後漢画像石墓（二石）には、

孝子丁蘭父

此丁蘭父

と記す（右から）。漢代の丁蘭図においては、蘭が母の像を作ったとするものは見当たらず、それらの粉本となった、漢代孝子伝中の丁蘭譚は、おそらく丁蘭が父の像を作ったとするものであっただろうと思われる。そもそも丁蘭の話は、丁蘭が木像に仕えるという異様な話であるが、漢代のそれは、その木像が実父のものですらく、妻の父（丈人）の像であるという点で、さらに異様なものであった可能性が高い。残念ながら、そのような孝子伝類、文献資料は、管見に入らない（孫盛逸人伝へ太平御覧四一四所引）等、「少喪_二考妣_一……刻_レ木為_レ人、髣髴親形。事_レ之若_レ生」とする例はある。考妣は、亡き父母）。ところが、六朝期に入ると、例えばボストン美術館蔵北魏石室の丁蘭図（左右上）が、

丁蘭事^二木母^一

と榜題する以下、丁蘭の作つた像は、母の像であるという風に、現存する遺品の全てが、母へと変わつてゆく。このことは、孝子伝類においても同様なのである。すると、丁蘭譚における木像の父（丈人）から母（また、二親）への変化は、漢から六朝への境目辺りで起きたものと思われ、前掲劉向孝子図の丁蘭譚は、丁蘭の作つた像を、父でなく母の像としている点、その成立が漢代に溯るものとは一寸考え難く、やはり六朝以降のものとすべきことが明らかであろう。さて、前述ポストン美術館蔵北魏石室の丁蘭図と、劉向孝子伝の丁蘭譚との関係は、なお一考の余地がある。最後に、4董永に關しては、例えば法苑珠林四十九（古今圖書集成明倫・家範・父子19、夫婦93にも）、句道興搜神記、太平御覽四一一に引かれる、それぞれの劉向孝子伝の逸文間における、行文の異同が大きい。三者の本文を併せ示せば、次の通りである。

法苑珠林所引

又、董永者、少偏孤与^レ父居。乃肆^二力田畝^一、鹿車載^レ父自隨。父終。自売^二於富公^一、以供^二喪事^一。道逢^二一女^一。呼与^レ語云、願為^二君妻^一。遂俱至^二富公^一。富公曰、女為^レ誰。答曰、永妻、欲^レ助^レ償^レ債。公曰、汝織^二三百匹^一、遣^レ汝。一句乃畢。女出門謂^レ永曰、我天女也。天令^四

我助^二子償^二人債^一耳。語畢忽然不知^二所在^一。
句道興搜神記所引

昔劉向孝子図曰、有^二董永者^一。千乘人也。小失^二其母^一、独養^二老父^一、家貧困苦。至^二於農月^一、与^二轆車^一推^二父於田頭樹蔭下^一、与^二人客^一作、供養不^レ闕。其父亡歿、無^二物葬送^一。遂從^二主人家典^二田^一、貸^二錢十萬文^一。語^二主人^一曰、後無^二錢還^一主人時、求^二与^レ歿身主人為^レ奴一世^一常^レ力。葬^レ父已了、欲^レ向^二主人家^一去。在^二路逢^一一女。願与^レ永為^レ妻。永曰、孤窮如此、身復与^レ他人為^レ奴、恐^レ屈^二娘子^一。女曰、不^レ嫌^二君貧^一、心相願矣。不^レ為^レ恥也。永遂共到^二主人家^一。主人曰、本期^二一人^一、今二人來何也。主人問曰、女有何技能。女曰、我解^レ織。主人曰、与^レ我織^二絹三百疋^一、放^二汝夫妻^一歸家。女織經^二一句^一、得^二絹三百疋^一。主人驚怪、遂放^二夫妻^一歸還。行至^二本相見之處^一、女辭^レ永曰、我是天女。見^二君行孝^一、天遣^二我借^二君償^レ債^一。今既償了、不^レ得^二久住^一。語訖、遂飛上^二天^一。前漢人也。

太平御覽所引

又曰、前漢董永千乘人。少失^二母^一、独養^二父^一。父亡、無^二以葬^一。乃從^レ人貸^二錢一万^一。永謂^二錢主^一曰、後若無^二錢還^一、君当^二以^レ身作^二奴主^一。甚^二慙^一之。永得^二錢葬^レ父畢、將^二往為^レ奴^一。於^レ路忽逢^二一婦人^一。求^レ為^二永妻^一。

永曰、今貧若^レ是身復為^レ奴、何敢屈夫人之為^レ妻。婦人曰、願^レ為^レ君婦、不^レ恥^レ貧賤。永遂將^レ婦人^①至。錢主曰、本言^レ一人、今何有^レ二。永曰、言^レ一得^レ二、理何乖乎。主問^レ永妻^②曰、何能。妻曰、能織耳。主曰、為^レ我織^③千足絹、即放^④爾夫妻。於是索^⑤糸、十日之内、千足絹足。主驚、遂放^⑥夫婦二人。而去行、至^⑦本相逢処。乃謂^⑧永曰、我是天之織女。感^⑨君至孝、天使^⑩我償^⑪之。今君事了、不^レ得^⑫久停。語訖、雲霧四垂、忽飛而去。

右の三通りの劉向孝子伝の内、第一の法苑珠林所引の本文は、例えば二十卷本搜神記一28の董永譚と酷似する。第三の太平御覽所引のものも、後半の一部が二十卷本搜神記とよく似るが、このことについては、かつて西野貞治氏が、「これ〔劉向孝子伝〕を引用した搜神記も必ずしも干宝原著のままでない」ことを断わりつつ、「或は搜神記が劉向孝子伝〔図〕の説話をそのまま引いたかと推測される」とし、さらに第二の句道興搜神記所引のそれに言及して、「このことは近年敦煌から発見された句道興撰といふ搜神記の俗本の中に、この説話が見えて劉向孝子図の引用を明示してゐることから傍証される」と述べられたことがある。また、西野氏は、第二の、「御覽卷四一一に引かれた劉向孝子図に「前漢の董永」といふ表現の見える如きは、「前

漢」とは後漢に対する前漢であつて前漢の人物がかかる称呼を用ひる筈がないといふ点からもこの書は偽託でないかとも思はれ」ととされている（句道興搜神記末尾にも、「前漢人也」と見える）。さらに、氏が、後漢武氏祠画像石（武梁祠三石、榜題「永父」「董永千乘人也」。千乘は、山東省高苑県北）、曹植の靈芝篇、ボストン美術館藏北魏石室（右石上、「董永看^①父助時」、ネルソン・アトキンズ美術館藏北魏石棺（左幫、「子董永」）などとの対照を通じて、「董永の父の生存中に天の織女が天降つてその孝をたすけた事を意味するに違ひない」という点を踏まえて、

董永の説話にしても、元来は靈芝篇に詠まれたように、董永が父に孝養をつくす為に起きた借財の為に困苦してゐたところ、天から織女が降つて機織によつて借財償却を助けたといふ伝説があつたものを、その孝行を誇張する為に織女下降の原因として父の歿後葬式の費用に困つて身を奴に売つてその葬式を終へたといふ孝行実施に伴ふ困難さを誇張し補填したものと思はれる。そしてこの誇張し補填された伝承と元来の伝承との二の伝承がある時期には並んで伝はつたが、やがて元の型のものが失はれたものと思ふ

という、非常に興味深い仮説を提示されるに至っている。西野氏の仮説、或いは、董永譚の元型即ち、その漢代以前

の形に関しては、近時見出だされた泰安大汶口後漢画像石墓の董永図（上部に三人の羽人、鹿車の左に子供へ董永変に言う、董仲か等が見える）なども含め、なお今後のさらなる検討が俟たれよう。

二

2 蕭広済孝子伝

蕭広済孝子伝については、隋書経籍志（以下、隋志と称する）に、

孝子伝十五卷晉輔国將軍蕭広済撰

旧唐書経籍志（旧唐志）に、

孝子伝十五卷蕭広済撰

新唐書芸文志（新唐志）に、

蕭広済孝子伝十五卷

などが見え、十五巻のものであったらしい。^①作者の蕭広済に関しては、晋の輔国將軍であつたことの外は、姚振宗が「蕭広済始末詳」（隋書経籍志考証）と言うように、不明である。輔国將軍は、晋代の將軍号の一つで、三品官に当たる。現在三十条余りの逸文が確認出来る。

3 王歆孝子伝

この書は、荊泮林の古孝子伝（十種古逸書所収）に、王

歆孝子伝の項を立てて、「案王歆孝子伝、隋唐志皆不著録」と言い、太平御覽引書目に、「王歆孝子伝」を上げる（但し、太平御覽本文に、「王韶之孝子伝」、「王韶孝子伝」が引かれるにも拘らず、引書目に王韶之孝子伝はなく、歆を韶に作る本もある）。また、近時の孫啓治、陳建華氏『古佚書輯本目録附考証』史部伝記類「王歆孝子伝」の注には、「王歆、生平不詳。《隋志》史部謂梁有王歆《後漢林》二百卷、置蕭子顯《後漢書》之後、疑即此人。若是、則歆為梁人」とされている。^②しかし、この王歆という人物また、その孝子伝に関しては、疑問が多いのである。例えば荊泮林が、「御覽十三。初學記一引王歆孝子伝末、有遂憂卒三字、余並同」と注して、王歆孝子伝の逸文として掲げたのは、左の竺弥（竺彌とも）の一条である（殆ど同じものが、広博物志十八、淵鑑類函八、佩文韻府十一・五などにも見える）。初學記一、太平御覽十三の竺弥の本文を併せて示せば、次の通りである。

初學記

王歆孝子伝曰、竺彌、字道綸。父生時畏雷。每至天陰、輒馳至墓、伏墳哭。有白兔在其左右。遂憂卒。

太平御覽

王歆孝子伝曰、竺弥、字道綸。父生時畏雷。每至

天陰、輒馳至^レ墓、伏^レ墳哭。有^二白兔在^一其左右^一。ところが、右の「王歆」孝子伝竺弥条は、殆ど全く同じものが、「王韶」孝子伝として芸文類聚二、白氏六帖一等に見えるのである（荊泮林古孝子伝不見）。両者の竺弥の本文を併せ示せば、次の通りである。

芸文類聚

王韶孝子伝曰、竺弥、父生時畏^レ雷。每^レ至^二天陰^一、輒至^レ墓、伏^レ墳悲哭。有^二白兔在^一其左右^一。

白氏六帖

王韶孝子伝、竺珍、字道倫。父生時畏^レ雷。每^レ至^二天陰^一、輒伏^レ墳而泣。

そして、それらに「王韶」孝子伝と称されているのは、次に述べる王韶之孝子伝のことらしい。と言うのも、竺弥についてはもう一条、北堂書鈔に「王韶孝子伝云」とする逸文が伝わっていて、荊泮林は、こちらは王韶之孝子伝の方に入れている（出典注記「書鈔」）。北堂書鈔一二九儒二十四「道倫冬不^レ服^レ襦」注に引かれた逸文の本文を示せば、次の通りである。

王韶孝子伝云、竺彌、字道倫、本外國人。居^二吳興^一、遂為^レ民。父母亡。道倫瘠毀、冬不^レ服^二襦袴^一。

右は、明らかに同じ人物の話であつて（吳興は、浙江省吳興県、瘠毀は、喪中に痩せ細ること、襦袴は、上下の肌

着）、先の伏墳譚共々、一つの王韶之孝子伝の竺弥の条が分かれたものと推定される（因みに、王韶之は、吳興太守であつた）。さて、荊泮林は、北堂書鈔に引く竺弥条に、周青（出典注記「御覽四百十五、六百五十六」）、李陶（「類聚九十二」）の二人を加え、

周青

李陶

竺弥

の計三条を王韶之孝子伝としているが、前述竺弥の場合同様、周青、李陶に関しても、王韶之孝子伝を「王韶孝子伝」と略称することが、圧倒的に多い。今、その周青、李陶の場合の出典表記を一覧として示せば、左の如くである（*は、荊泮林の出典注記。周青は、天中記二十四に「王韶之孝子伝」、淵鑑類函二七一に「王韶孝子伝」とするものもある。なお太平御覽五五五には、吳達に関連して、「亦出^二……王韶孝子伝^一」とも見える）。

周青

李陶

王韶之孝子伝（*太平御覽45）

王韶孝子伝（*芸文類聚92）

王韶孝子伝（*廣博物志45）

王韶孝子伝（淵鑑類函423）

王韶之孝子伝（令集解13）

一 (参考、孝子伝へ太平御覧920、韻府拾遺19)

このことから、王歆孝子伝については、王韶之の孝子伝が何時しか王韶孝子伝とも称され、それが誤って王歆孝子伝と表記されるに至つたものと推考出来る。すると、上掲初学記一、太平御覧十三などの「王歆孝子伝」は、表記が誤っていることになるが、例えば章宗源がその初学記一の竺弥条を、北堂書鈔一二九の同条などと共に王韶之孝子伝のものとし、

王韶孝子伝初学記作歆

と言ひ(隋書經籍志考証)、姚振宗も同様で、なお「章氏考証」を引いて、

王韶之孝子伝、韶、初学記作歆案作歆者非也

と述べているのは、流石と言うべきである。従つて、荊泮林が初学記一、太平御覧十三を出典とした王歆孝子伝唯一の竺弥条は、王韶之孝子伝の逸文と認めて差支えなく、従つて、王歆孝子伝というものは、存在しないということになるであらう。

4 王韶之孝子伝

王韶之孝子伝に関しては、隋志に、

孝子伝讀三卷王韶之撰

旧唐志に、

孝子伝讀十五卷王韶之撰

新唐志に、

王韶之孝子伝十五卷

又讀三卷

とある。劉宋の王韶之(三八〇—四三五)は、字休泰、琅邪臨沂(山東省臨沂県)の人で、呉興太守であつた(宋書六十)。宋書、南史に伝がある。宋書六十列伝二十の王韶之伝を示せば、次の通りである。

王韶之字休泰、琅邪臨沂人也。曾祖廙、晋驃騎將軍。祖羨之、鎮軍掾。父偉之、本國郎中令。韶之家貧、父為鳥程令、因居渠境。好史籍、博涉多聞。初為衛將軍謝琰行參軍。偉之少有志尚、當世詔命表奏、輒自書寫。太元、隆安時事、小大悉撰錄之、韶之因此私撰晋安帝陽秋。既成、時人謂宜居史職。即除著作佐郎、使統後事。訖義熙九年。善叙事、辭論可觀、為後代佳史。遷尚書祠部郎。晋帝自孝武以來、常居內殿、武官主書於中、通呈以省官一人。管司詔誥、任在西省、因謂之西省郎。傅亮、羊徽相代在職、義熙十一年、高祖以韶之博學有文詞、補通直郎、領西省事。轉中書侍郎。安帝之崩也、高祖使韶之与帝左右密加酖毒。恭帝即位、遷黃門侍郎、領著作郎、西省如故。凡諸詔黃、皆

其辭也。高祖受_レ禪、加_二驍騎將軍本郡中正、黃門如_レ故、西省職解、復掌_二宋書。有司奏東治士朱道民禽_二三叛士、依_レ例放遣。韶之啓曰、尚書金部奏事如_レ右、斯誠檢忘_二一時權制、懼非_レ經國弘本之令典。臣尋_二旧制、以_レ罪補_レ士、凡有_二十余条、雖_レ同異不_レ案、而輕重実殊。至於詐列_二父母死、誣_レ罔父母、淫乱破_レ義、反逆此_二四条、実窮_レ乱抵逆、人理必尽、雖_レ復_二殊刑過制、猶不足_二以塞_レ莫大之罪。既獲_二全_レ首領、大造已隆、寧可_レ復逐拔_二徒隸、緩_レ帶當年、自_レ同_二編戶_一列_中齒齊民乎。臣懼此制永行、所_レ虧実大。方今聖化惟新、崇_レ本棄_レ末、一切之令、宜_レ加_二詳改。愚謂此_二四条不_レ合_二加_レ贖罪之恩。侍中褚淡之同_二韶之_一三条、却宜_レ仍_レ旧。詔可。又駁_二員外散騎侍郎王寔之請_レ假事_一曰、伏尋旧制、群臣家有_二情事、聽_レ併急六十日。太元中改_レ制、年賜_二假_レ百日。又居在_二千里外_一聽_レ併請_二來年限_一合為_中二百日。此蓋一時之令、非_レ經通之旨。會稽雖_二塗盈_二千里、未_レ足_二為_レ難、百日歸休、於事自足。若私理不_レ同、便應_二自表陳解、豈宜_二名班_一朝列_一而久淹_中私門。臣等參議、謂不_レ合_二開許。或家在_二河洛及嶺河漢者、道阻且長、猶宜_二別有_二条品、請付_二尚書_一詳為_二其制。從_レ之。坐_二璽封謬誤、免_レ黃門、事在_二謝晦傳。韶之為_二晉史、序_二王珣貨殖王廙作_レ乱。

珣子弘、廙子華、並貴顯、韶之懼_二為所_レ陷、深結_二徐羨之、傅亮等。少帝即位、遷_二侍中、驍騎如_レ故。景平元年、出為_二吳興太守。羨之被_レ誅、王弘入為_レ相、領_二揚州刺史。弘雖_レ与_二韶之_一不_レ絶、諸弟未_レ相識者、皆不_レ復往来。韶之在_二郡、常慮_二為_レ弘所_レ繩、夙夜勤厲、政績甚美、弘亦抑_二其私憾。太祖兩嘉_レ之。在_二任積年、稱為_二良守、加_二秩中二千石。十年、徵為_二祠部尚書、加_二給事中。坐_二去_レ郡長取_レ送故、免_レ官。十二年、又出為_二吳興太守。其年卒、時年五十六。七廟歌辭、韶之制也。文集行_二於世。子暉、尚書駕部外兵郎、臨賀太守。

王韶之には、孝子伝の他、晋紀十卷（隋志）、崇安記十卷（唐志、隆安紀十卷（南史五十一）とも）などの著作もある。王韶之の孝子伝は、前述のように、周青、李陶、竺弥（二種）の逸文三条が確認し得る。また、上述太平御覽五五五によれば、かつて吳達条も存したらしい。

5 周景式孝子伝

周景式孝子伝については、荊泮林の古孝子伝に、

案周景式孝子伝、隋唐志皆不_レ著録

と言う如く、太平御覽引書目にも、「周景式孝子伝」を上げるが、詳しいことは全く分からない。初学記二十九に、

「周索氏孝子伝曰」とするものは、字形の類似による誤記であろう。三条（右の初学記所引を加えれば、四条）の逸文が確認出来る。

6 師覚授孝子伝

師覚授孝子伝に関しては、隋志に、

孝子伝八卷 師覚授撰

旧唐志に、

又〔孝子伝〕八卷 師覚授撰

新唐志に、

師覚授孝子伝八卷

とある。また、後掲南史にも、師覚授が、

孝子伝八卷

を撰んだことが見える。劉宋の師覚授（一四三・五頃）は、名を昂、字を覚授と言ひ、南陽の涅陽の人である（南史七十三、宋書五十一、元和姓纂十。涅陽は、河南省鄧県東）。南史七十三列伝六十三孝義上の師覚授伝を示せば、次の通りである。

師覚授字覚授、南陽涅陽人也。与外兄宗少文並有素業、以琴書自娛。於路忽見一人持書一函、題曰、至孝師君苦前。俄而不見。捨車奔帰、聞家哭声、一叫而絶、良久乃蘇。後撰孝子伝八卷。宋臨川

王義慶辟為州祭酒主簿、並不就。乃表薦之、会卒師覚授の外兄、宗少文（三七五―四四三）については、宋書九十三列伝五十三隱逸に伝があり（宗炳字少文、南陽涅陽人也……母同郡師氏）と見え、師覚授の父の姉妹が宗少文の母であつたのだろう、そこにも師覚授に関する、やや簡略な記述があつて、

炳外弟師覚授亦有素業、以琴書自娛。臨川王義慶辟為祭酒主簿、並不就、乃表薦之、会病卒

とされる。宋書五十一列伝十一宗室における、元嘉十二（四三五）年の臨川王劉義慶（武帝〔劉裕〕弟、道隣の子）の上表中にも、師覚授についての言及がなされ、

处士南郡師覚、才学明敏、操介清修、業均井渫、志固氷霜。臣往年辟為州祭酒、未汚其處。若朝命遠暨、玉帛遐臻、異人間出、何遠之有

と述べている。師覚授は、おそらく生涯仕えることがなかつたのであろう。また、元和姓纂十「師」¹⁸²に、

狀云、本姓師氏。避晋景王諱、改為帥氏¹⁸³に、

南陽涅陽。宋有帥覚授、一云名昂、著孝子伝。臨川王義慶辟為州祭酒、不就。入宋書孝義伝。案南史作師覚授、宋書不載

とある。元和姓纂に見える師覚授の帥、師字の違いに関し、

章宗源は、「愚按元和姓纂、覺授、一名昂。姓師、在「入声質部。据此則師乃帥字之誤。然諸書皆作「師」と指摘している（『隋書經籍志考証』）。師覺授孝子伝は、十条近くの逸文が現存している。中で、後漢武氏祠画像石（武梁祠二石。榜題「趙□詒」、和林格爾後漢壁畫墓（中室北壁一層。榜題左から「□□」「□句□」）に描かれた趙荀など、我が国伝存の両孝子伝また、他の古孝子伝の逸文類には見当たらない話を含む点、殊に貴重とすべきである。

付記 小稿及び、後掲「改訂古孝子伝逸文一覧」は、平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)による成果の一部である。

注

- ① 拙著『孝子伝の研究』（佛教大学鷹陵文化叢書5、思文閣出版、平成13年）I—1
- ② 西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」（『人文研究』7・6、昭和31年7月）
- ③ 舜については、拙稿「重華贅語—孝子伝図と孝子伝—」（『論集 太平記の時代』〈新典社研究叢書158、新典社、平成16年〉所収）、また、昔話「継子の井戸掘り」など、孝子伝と昔話との関連については、拙稿「昔話と孝子伝—孝子伝の受容—」（『論集「伝承と受容（日本）」』〈平成10〜14年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(A)118「古典学の再構築」研究成果報告集VII、B02「伝承と受容（日本）」調整班研究報告、「古典学の再構築」総括班、平成15年3月〉「日中幼学書の比較文化的研究」所収 参照。

④ 例えば敦煌本北堂書鈔体甲に引く「劉向孝子（伝）」は、破損が甚だしいが、行文が大幅に異なるようである。王三慶氏『敦煌類書』（麗文文化事業股份有限公司、一九九三年）録文篇321—01—03参照。

⑤ 搜神記については、西野貞治氏「搜神記攷」（『人文研究』4・8、昭和28年8月）、「敦煌本搜神記の説話について」（『人文研究』8・4、昭和32年4月）、「敦煌本搜神記について」（『神田博士還暦記念書誌学論集』、神田博士還暦記念会、昭和32年）などに詳しい。

⑥ 橋本草子氏「郭巨」説話の成立をめぐる（『野草』71、平成15年2月）

⑦ 西野貞治氏「董永伝説について」（『人文研究』6・6、昭和30年7月）

⑧ 西野氏が、後漢武氏祠画像石の董永図について、「武梁祠画像石に見える樹の右に一小児の攀援して上らんと欲するもののあるのは、孝子伝に見えぬもので小児に関する伝承があるのになからうかといふ先にあげた疑問が解決されて、董永と天女の間に董仲といふ子のあつた伝承を後漢まで引上げ得るのである」（注⑦前掲論文）と指摘されていることは、注意を要する。

注①前掲拙著II二、注②参照。

⑨ 西野氏注⑦前掲論文

⑩ 藤原佐世の日本国見在書目録の雑伝家に、「孝子伝図一卷。々々々讀十巻」と見えるものが劉向のそれであるとすれば、

劉向孝子伝は、早くから我が国に齎されていたことになる。令集解十三賦役令「有『精誠通感』」注所引の古記にも、「劉向孝子図」郭巨条の引用が見えるが、直接引用ではない。注①前掲拙著Ⅰ三また、東野治之氏「律令と孝子伝」漢籍の直接引用と間接引用」（『万葉集研究』24、平成12年6月）参照。

⑪ 章宗源の隋書經籍志考証に、「孝子伝十卷晉補國將軍章弘撰」とあり、姚振宗の隋書經籍志考証二十に、「案章氏載『是書一止三十卷。不知所見為何本』と云う。我が国の具平親王撰弘決外典鈔、外典目にも、

孝子伝十五卷（弘治撰）

と見え、卷二に、三州義士（両孝子伝8）、五郡孝子などを引く（共に、湛然の止観輔行伝弘決四之三に見える）。

⑫ 孫啓治、陳建華氏「古佚書輯本目錄附考証」（中華書局、一九九七年）。なお姚振宗は、「梁有『王詔後漢林二百卷亡』とし、

「王詔始末未詳」と述べている（隋書經籍志考証十一）。

⑬ なお事類賦三、幼学指南鈔二などにも、「孝子伝曰」として同文の逸文が見える（北堂書鈔一五二、山堂肆考六、古今圖書集成曆象・乾象・雷電78などにも）。参考までに、両書の本文を併せ示しておく。

事類賦

孝子伝曰、竺弥、字道綸。父生時畏雷。每至天陰、輒馳至墓、伏墳哭。有白兔在其左右。

幼学指南鈔

孝子伝曰、竺弥、字道綸。父生時畏雷。至天陰、輒馳至墓、伏墳哭百日。白兔在其左右。遂以憂卒也。

⑭ 南史二十四列伝十四の王韶之伝を示せば、次の通りである。

王韶之字休泰、胡之從孫而敬弘從兄弟也。祖羨之、鎮軍掾。

父偉之、少有志尚、当世詔命表奏、輒手自書写。太元、隆安時事、大小悉撰錄。位本國郎中令。韶之家貧好学、嘗三日絕糧而執卷不輟、家人謂之曰、困窮如此、何不耕。答曰、我常自耕耳。父偉之為烏程令、韶之因居吳境。好史籍、博涉多聞。初為衛將軍謝琰行參軍、得父旧書、因私撰晋安帝陽秋。及成、時人謂宜居史職。即除著作佐郎、使統後事、詔義熙九年。善叙事、辭論可觀。遷尚書祠部郎。晋帝自孝武以來常居内殿、武官主書於中通呈、以省官一人管詔詔、住西省、因謂之西省郎。傅亮、羊徽相代在職。義熙十一年、宋武帝以韶之博學有文辭、補通直郎、領西省事、軫中書侍郎。晋安帝之崩、武帝使韶之与帝左右密加酖毒。恭帝即位、遷黃門侍郎、領著作、西省如故。凡諸詔黃皆其辭也。武帝受命、加驍騎將軍、黃門如故。西省職解、復掌宋書。坐璽封謬誤、免黃門、事在謝晦伝。韶之為晋史、序王珣貨殖、王廙作乱。珣弘、庾子華並貴顯、韶之懼為所陷、深附結徐羨之、傅亮等。少帝即位、遷侍中。出為吳郡太守。羨之被誅、王弘入相、領揚州刺史。弘雖与韶之不絶、諸弟未相識者皆不復往来。韶之在郡、常慮為弘所繩、夙夜勤勩、政績甚美、弘亦抑其私憾、文帝尚嘉之。韶之稱為良守。徵為祠部尚書、弘給事中。坐去郡長取送故、免官。後為吳興太守、卒。撰孝伝三卷。文集行於世。宋廟歌辭 韶之所制也。

⑮ 子暉、位臨賀太守

章宗源の隋書經籍志考証二、姚振宗の隋書經籍志考証十二の「晋紀十卷」に詳しい。隆安紀の隆安（三九七―四〇二）は東晋、安帝の年号だが、唐・玄宗の諱劉（劉基）を避けて、唐志が崇に改めたものであろう（陳新会、史讀举例三・二十八、八・七十六）。

①⑥ 章宗源、隋書經籍志考証十三參照。

①⑦ 晋の景帝の諱、師を避けて、姓の師を帥と改めたもの（史諱
举例二・五、八・七十四）。景帝は、司馬師、懿（宣帝）の長
子。正元二（二五五）年に没した後、昭（文帝）により、咸熙
元（二六四）年五月に晋景王、炎（武帝）により、泰始元（二
六五）年十二月に景帝と追号された（晋書二、三）。

①⑧ 章宗源の隋書經籍志考証、姚振宗の隋書經籍志考証十三參照。

①⑨ 注①前掲拙著II一參照。なお和林格爾後漢壁画墓の趙荀図は、
平成16年9月、実地調査の折に見出だしたものである。当壁画
墓に描かれた孝子伝図の詳細については、近く機会を改めて報
告したい。